

Executive Dialogue

役員鼎談

「問い」と「協創」が
未来をつくる。
AI時代に求められる、
人や組織のあり方。

AIの進化や地政学リスクの高まり、人口減少……。社会が大きく変わりゆくなか、企業や行政、市民それぞれの役割も、あらためて問い直されています。こうした時代に、テクノロジーは何を可能にし、人はどのような価値を担っていくのでしょうか。シビックテックの第一人者である一般社団法人コード・フォー・ジャパン 代表理事の関治之氏を迎え、当社の執行役員ふたりが、AI時代におけるSlerの役割、お客さまである企業および生活者視点での価値創造、そして社会課題の解決に向けた協創のあり方について立場を超えて語り合いました。



一般社団法人コード・フォー・ジャパン
代表理事／
ソフトウェアエンジニア／起業家

関 治之

ITを活用して地域課題の解決をめざす一般社団法人コード・フォー・ジャパンを設立。行政・市民・企業・エンジニアが協働するシビックテックの実践と普及を牽引してきた第一人者。テクノロジーを社会実装につなげる視点と、組織や立場の枠を超えたオープンな連携に強みを持つ。



株式会社日立ソリューションズ
執行役員
産業イノベーション事業部長

添田 知子

日本企業へのERP導入や海外拠点へのロールアウトなど大規模なグローバルプロジェクトで、SE、プロジェクトマネージャーを多数経験。現在は、製造業を中心とする産業イノベーション事業部の責任者として、当社グループのサステナブルな事業推進に向け、海外グループ会社も含めた連携や人材交流も促進している。



株式会社日立ソリューションズ
執行役員
サステナブルシティビジネス事業部長

栗井 基修

公共・社会分野向けシステムの開発やSE、プロジェクトマネージャーを経験。その後、新規ソリューションの立ち上げや海外商材のアライアンスを担当。現在は、サステナブルシティビジネス事業部の責任者として、都市空間情報やモビリティ分野を中心に、社会課題の解決に向けた新たな価値創造に取り組んでいる。

正解のない時代だからこそ、自ら「問い」を立てる。

関 私は中学生の頃からプログラミングに親しんできましたが、最近は自分でコードを書く機会がほとんどありません。AIによってエンジニアに求められる役割そのものが変わり始めていると感じます。危機感があるからこそ、社会全体が一気に動き始めている印象がありますね。

粟井 私が携わってきたモビリティや都市領域では、安全性や信頼性が求められることから、これまでは多くの審査やチェックを経て意思決定を行うケースが一般的でした。しかし近年は、AIを活用しながら意思決定のスピードを高めようという動きが広がっています。一方で、判断を誤ったときのリスクも大きくなる。だからこそ、技術だけではなく、ガバナンスや責任設計も重要になっていると感じます。

添田 世界に目を向けると、さまざまな領域で変化のスピードが加速しています。ITに限らず、これまで当たり前だった常識が大きく変わりつつある。だからこそ、テクノロジーを「何のために使うのか」

が重要になっているのではないのでしょうか。日本では人口減少が進み、社会インフラや産業を支える人材も不足していきます。限られたリソースの中で持続可能な社会を実現するためにも、ITの役割はさらに大きくなっていくと思います。

関 日本の行政はデジタル化が遅れていると言われてきましたが、AIへのキャッチアップという点では、日本にもまだ大きな可能性があります。重要なのは技術そのものではなく、それをどう使うかです。AIが前提となる社会において、私たち一人ひとりがどのような未来を実現したいのかを考えることが、これまで以上に求められていると感じます。

粟井 そうですね。でも、エンジニアの本質は大きく変わらないと思っています。新しい技術に興味を持ち、「これを使えば、どんな価値が生まれるか」を考え続けること。その姿勢こそが重要です。

添田 未来を正確に予測できる人はいません。大切なのは、自ら未来を想像し、試行錯誤すること。その積み重ねが、自分の頭で考えられる人を育てていくのだと思います。

関 つまり、「やりたいこと」を持てるかどうかですよね。AIによってアイデアを形にするハードルは大きく下がりました。だからこそ、「どんな社会を実現したいのか」という問いを持てる人が重要になると思います。



お客さまの先にいる生活者まで。価値を届けるSlerへ。

添田 AIによって、お客さま自身が技術を活用できる領域はさらに広がっていくと思います。その一方で、「何を実現したいのか」を定義するのは人であることに変わりはないと思います。お客さまと対話しながら本質的な課題を見つけ、その先の未来像を描いていくことが、これからのSlerに求められる役割ではないでしょうか。

粟井 そのためには、現場にもっと深く入り込む必要があります。例えばモビリティやスマートシティの領域では、AIによる自律運用が進むほど、セキュリティやガバナンスの重要性も高まります。どこまでをAIに任せ、どこを人が担うのか。その線引きを社会視点で設計することも、Slerである私たちに求められる役割です。

関 AIによって開発そのものは容易になっても、社会の中で安心して使い続けられる仕組みをつくるには、専門知識や運用ノウハウが必要になります。そこは行政や市民

も期待している部分だと思います。

添田 私たちは企業のシステムを支援する立場なので、どうしても視点がお客さま企業の中だけで止まりがちです。でも、その先には生活者がいて、社会があります。業務効率化だけではなく、その先でどのような体験価値を生み出すのかまで考えることが重要です。そのようにマインドを変えていくことが、これからのSlerには必要だと思います。

粟井 私たちも、もっと生活者と向き合っていかなければいけないと感じています。さまざまな立場の人たちと現場で対話しながら、社会課題を自分ごととして捉えていく。その積み重ねが、本当に意味のある協創につながるのだと思います。

関 シビックテックの世界では、行政と市民がともに考えながら、手を動かして課題解決の種を作っています。でも、その声を仕様書に変換した瞬間、熱量が失われてしまうことがある。だからこそ、課題設定の段階から一緒に考え、運用や社会実装まで伴走してくれる企業の存在は、とても心強いです。



当事者同士の 「ゆるやかなつながり」で、 未来を協創していきたい。

粟井 そうした多様な立場の人たちと一緒に社会課題を解決するうえで大切なのは、協創そのものを目的化しないことです。成果を急ぐあまり、本質的な課題解決から離れてしまうこともあります。当社では、オープンなコミュニティ「ハロみん」を通じて、組織や立場を超えた「ゆるやかなつながり」を大切にしています。「こんな課題がある」「それなら何かできるかもしれない」。そんな小さな対話から、新しい協創が始まることも多いです。

添田 リアルな対話には特別な価値があります。雑談の中から思いもよらないアイデアが生まれることもある。AIは非常に優秀ですが、人と人との関係性から生まれる熱量や偶発性は、簡単には代替できないと思います。

関 AIによって生産性が上がったからこそ、むしろ人と人との信頼関係が重要になっているのかもしれない。「この人と一緒にやりたい」という関係性さえできれば、新しい価値は自然と生まれてくる。そうした「信頼の残高」が、これからの社会ではますます重要になる気がしています。

オープンなコミュニティ「ハロみん」

P.21



価値の連鎖で持続可能な社会を創る。

粟井 だからこそ、私たち一人ひとりが「どのような社会を実現したいのか」という意志を持ちながら行動していくことが大切だと考えています。私たちはお客さまの課題を解決するだけではなく、その周囲にいる人々やデータをつなぐことで、関連するさまざまな課題の解決へと広げていく。こうした価値の連鎖を生み出しながら、持続可能な社会の実現に貢献していきたいですね。

添田 私は、10年後も50年後も、誰もが自分らしく力を発揮できる社会であってほしいと思っています。そのためにも、自分たちの仕事が社会につながっているという実感を持ちながら、多様な人と協創し、自ら考えて行動できる人を増やしていきたい。当社は、それができる会社だと信じています。

関 未来に正解はありません。でも、答えのない

問いに向き合い続ける企業こそ、新しい価値を生み出していくのだと思います。社会課題を解決し、未来世代への責任を果たしていくために、これからも一緒に考え続けていきたいですね。



詳しくはこちら